むかしまつたけ

柳亭種彦 ゐうう

久保田彦作つゞる

ふるまつの寺

廿五編

紅英堂梓

へ13
3090
13

特
へ13
3090
13

室町源氏胡蝶の夢

廿五編上巻

里俤ふいふ縁いあのあて此室町い初編より二世種彦ぢ一白翁が。繭よりいぶせ〜胡蝶の巻。さぞて廿有余編。ちぐらかまたる脚色ふ。笠置の尼ぐ墨染衣。信濃ぐ運と加茂川染。らの巻中乃立おやま。真ぢ胡蝶ぐ紫の。花の御所染着飾りて。武将ぢ姪とたるまぐい。ちぐまろく〜ふ染上らば。ほんの形このぞで浮世と去り蝶とあふ色〜柳亭翁。予ぐ名の彦ふ因ぐ。この色い安受合ふいうちあぐひ〜ぐ。纏まろ兼〜支路ふ迷ふ小蝶の蔭法師。例の紺撥のあまろてあく。鈎火で乾ぢ一夜附出来のうるおいみゆる〜給へ。

明治十四年
初夏

久保田彦作記

室町御殿
男禁制

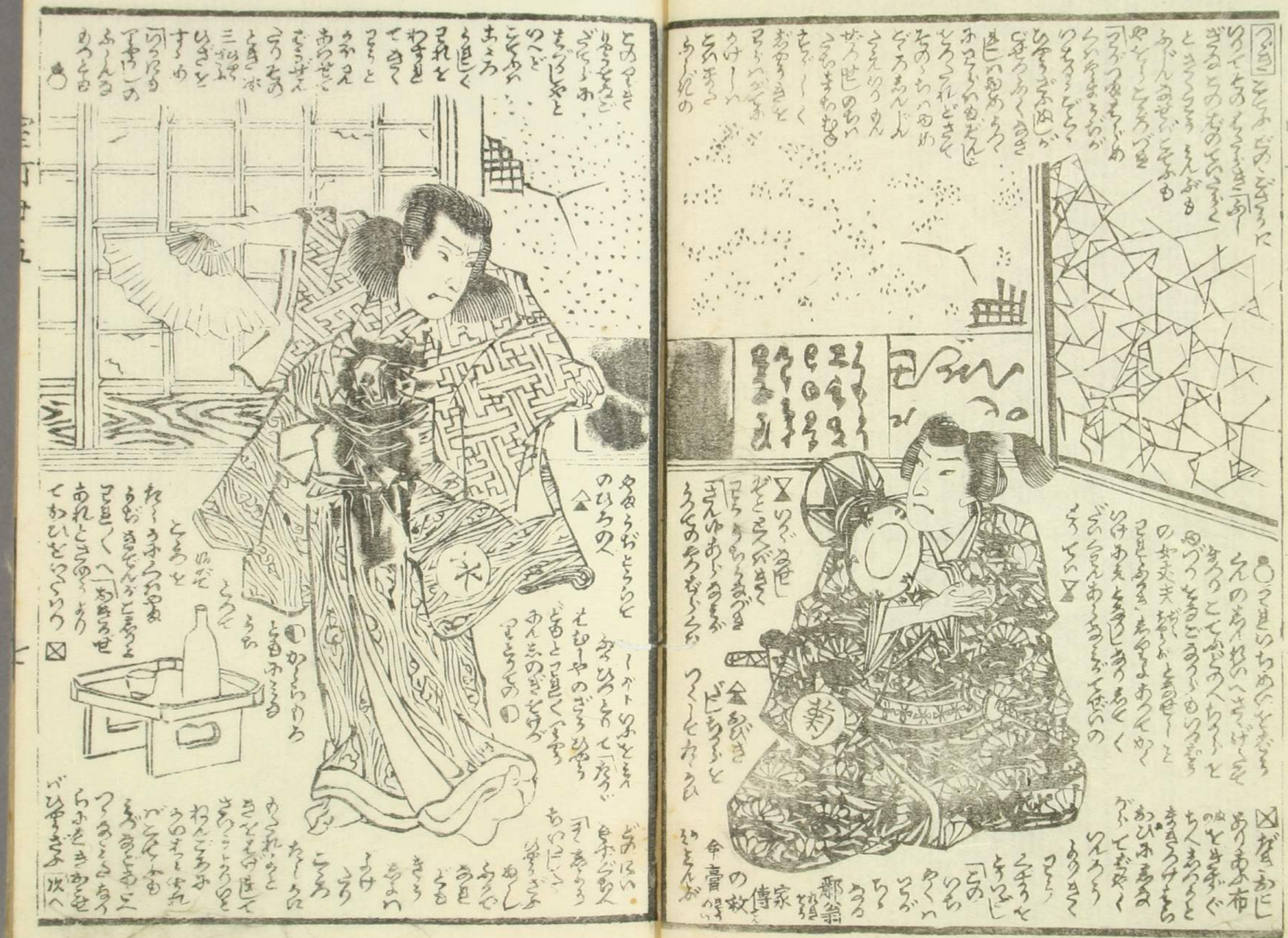
廣沼肥後

廿四編ぶつぶく

八瀬ぜの里さと
のつぶひまるゐ
おいぬ水三郎
ぶひきまへ

横濱常規
室町

菊
水
蝶



早
蝶
菊

下馬

つゞき　ともあらぬかうかうのうぢゆうあ
まりとやくさんくかたどのもやくく
よくいとろろとこゝへせきこゝるに全

彦作綴　國政　國松　合畫

下へつゞく

柳蔭月朝妻

十編　小さ亭有人作
大尾　梅朝樓國貞画

藪黄鸝八幡不知

十編　小さ亭有人作
大尾　錦朝樓芳虎画

阿玉ヶ池櫛月形

五編　爲永春水作
大尾　梅堂國貞画

八犬傳犬の反紙

六十　柳亭作
大尾　國政画

小學行儀法

全一冊

實母散

水隊　さんぜんさんご　十編南傳馬町東側
ふとんちよみと　1冊　堂孝輔作
切のいい美

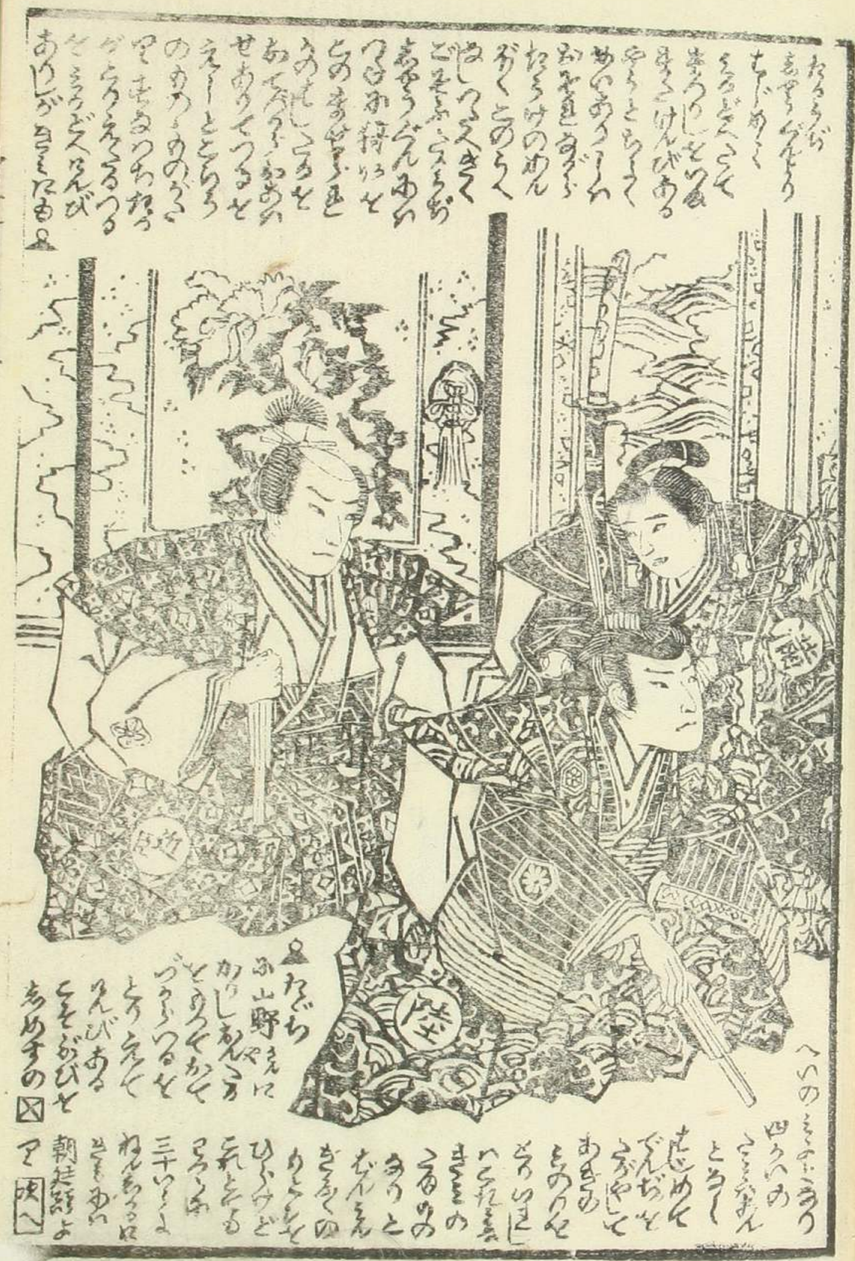
廿五編下
紅英青竹

むら
きらん
ちんと
小てふの
まきき
五湖
しの生

早

勅使
藤の中将
上

陸左エ門
公時
頼光
金太郎



信

氏

御茶道

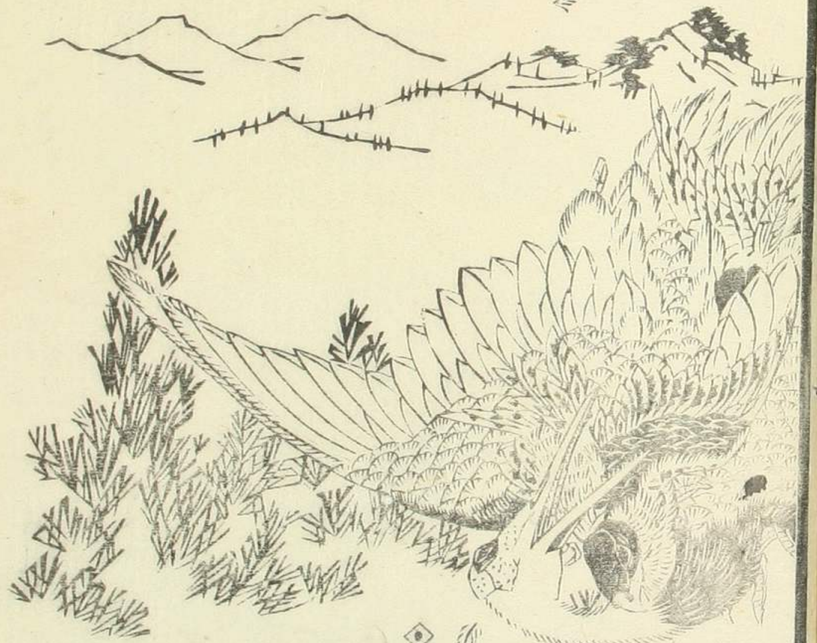
定
定

東
山
陸
南
大
和
国
陸
満

△ものもるくぢそうはもちろん
ぢやくあんナビのこともこぶ
きくのあんめざりといひ
たくそくあるんぎも
うねが田へぐひれるみー
いんちろのたせうどろんぞ
ひぐらのふるまひこころの
けんめんむさぼれど
かくあねこころに
へいくと
だうつと
とろろう
ぬむり
むこい

◐ なねとんきてーて
ぐろぐろぬくしころ
ところあいぎろめホ
めさまとぶぎしき
くりのこらんづ
ゲけんこんきい
ろうめれあとも
ろれとやなぶ
べんホとん
れんさく
ぎとしめ
らとあび
ところよ
ろうれ
ことれ
きこ
ある
めのえ
の

◐



ゐきこそろくくし」と
ちんそくゐせーといろ
ゐもいぎぎすぐ
このくくいあぎきれの
くくちうちぎくくくろぐん
きくくのごゐめどいいろぬま
ゐゐのとこころをけっーっ
やきいめんぢくゐげホくん
ゐゐろもゐ○ゐーかぐゐゆうぐん
ようくろうろいくゐみいろどのちく
ぢゆうホつるをけんびの柳放鷹
きんぐく大和やまのさんちろく
ゐんゐろゐるよー　ゐまてくれ
アゆーしゐいきくゐうぐいらくんぢどろ
ぢくろろのさうぢどきゆうゐうのゐん
まちろうけいせんびをつくしてきも
ゐんゐゆうホゐろうらんとゐまこの
てんろのゐせいホこびたくこのゐろく
ゐかくろくぎうくくうどのゐくくろぐ
ゐうゐんさきくもこゐろゐく
ぶぎゆうくいゆゐゐ　ゐろざゐゐんゐゆう
ぐんけよりゐんさくれゐぢくろの
けくぶんこゐくよゐゐくのゐんやど
ろうゐのぞくのくんとてんろのゐ
くんとくくふきくけんぺいきくぶ△

◎

こぶと
ゐろくひ
ゐるてい
ゐゐつぎ
と供奉ぐ
ゐいたぐ
らゐど
くろい
くゐぶゐ
ちくき
ゐゐ

次へ

妙

滿

彦作著

國政
國松 合畫

廿六ページへつづく

厚化粧萬年嶋田 九編 春水作 大尾 國貞画

新局九尾傳 九編 春水作 大尾 國貞画

室町源氏胡蝶卷 三十編 種彦作 大尾 國貞画

筆海四國聞書 十五編 種彦作 大尾 國貞画

鼠祠通夜譚 十編 種彦作 大尾 國貞画

月鴉墨画蜘蛛 廿編 種彦作 大尾 國貞画

童謡妙々車 三十編 種彦作 大尾 國貞画

花封菩玉章 十編 種彦作 大尾 國貞画

薄倫幼日記 三十編 春水作 大尾 國貞画

七姿寺葛飾譚 十五 種彦作 大尾 國貞画

京橋區南傳馬町壹丁目二番地
出板人 林吉蔵

室町源氏胡蝶の巻

彦作作る

國政画

二十八編

久保田彦作著
廿六編上
紅英堂梓

宝町源氏胡蝶の夢之

編上巻

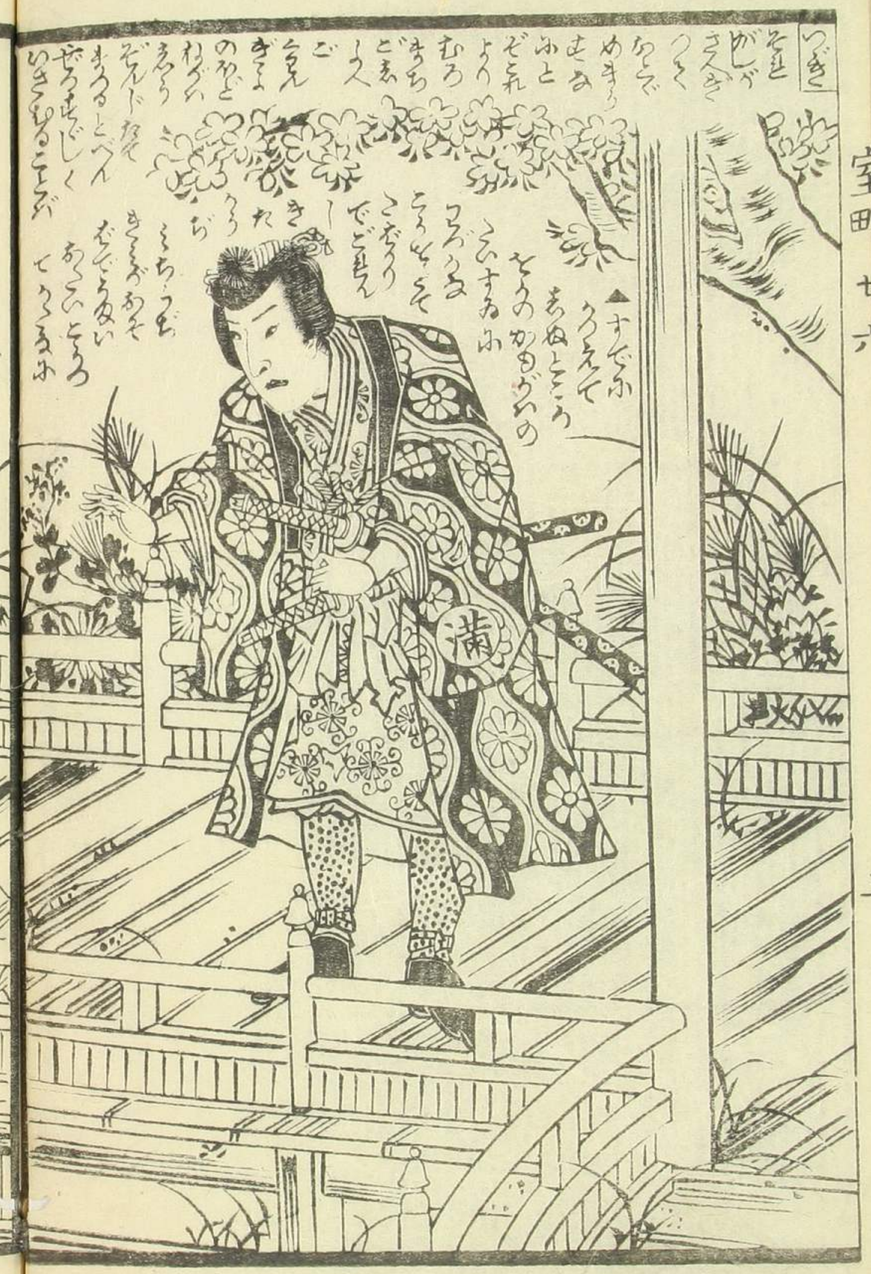
扨も此草紙も狂言ゑゝ當編あるゝ大詰のそろく
序口の仕組あくばつと浄瑠璃を縮むるとに
かゝる。笠置の山乃鷹狩に将軍家の危
難ゝゝ。山名が反逆の顕る邑口。大百日本素綱の
肌ぬぎ。刀を肩に旁々さゝぶべと。あんやゝヤツト故事
つゝ。すぐか約束の馬切おゝ三千両の黄金
は花。咲も初めぬ第二番目。箱根八里乃
馬士唄でその幕開も近くに
なるべ。猶御評狂言方の名
判を乞なくちゝ

竹柴幸治記

乙骨細次郎

偽花園

廣沼信濃の


つぎ
滿

滿
妙

種彦遺稿

國政画圖

つぎ　ゆろにしの皇帝ひしあざうがきろ死くあ　かくやあらんと　あじめ一書　ゆあのいかづち　らんとうひざう　のさこのさい　らんに

▲うつて　うあ食べとこいろに　ういうのあくハ四　李引のたる

▲きき水きを　とうぞさきくくを　そのまゆきまろ死

▲あぶまこりてその　すあたきのあとろく　まつぶぜことのねとと　びあぶめ水ゆぬその　ふぎひたとるふゆめ　あくぶてきゆくでに　いりしとろあつろにきこえ　るきこいのあんがく　ぶゆりへこれに

○ちん　ふを　すは　ちぶ　あま　ぶ

ま　ね　く　ち　ぶ　ま　ゆ　ぶ　ゆ　ぶ

下の巻へ

久保田彦作編次

柳蔭月朝妻　十編　山々亭有人作　大尾　梅朝樓國貞画

藪黄鶯八幡不知　十編　山々亭有人作　大尾　錦朝樓芳虎画

阿玉ケ池梛月形　五編　爲永春水作　大尾　梅堂國政画

八犬傳犬の双紙　六十　柳亭作　大尾　國政画　小學行儀法　全一冊

實母散

東京　千鳥堂孝誠館

室町源氏
初葉の巻
梅堂國政画
廿六編下

上の巻よりつゞき

㊀ かのあくびし きめしのぶ きくさまをまぶ
あろあめのとぞぞ
どまよおそろこれ よーこうぎこ
こるいづまも
むろまちの いよくふーれの
たるのごあよ めそはしところの
ぞめあくびし うちふいかぞせ
きあんめー どもふいふまに
のものをぢ めーうたるくびあい
さんーしそ やそふ一面ぢのかぞを
いざそろ ふそしこーげをもち
きくふい びんのろまを
あんめ うきあげるぞして
うくとさ のろかさるたその
いうよう りそはしことろぎ
しーく ふいふるいとを
やぶ うくてのどくこに
ぶと このことるふん
こるあん こーこうこうハ▲
んのぞ
あり
をと
ぞうく
て㊀

▲まうりそ
こうくろ
「いるらの
ところく
きこうしわ
ぶくいろある
ところわく
あぶふる音色
ぬろあんがくの
くよときれいろい
こんぞうのうまう
びんぐーあらぶぢこう
げおあもーこきこと
どもうこれにつけ
てもこのくふのあじ
のあるといろるひとう
すとるあーきるぬと
つきく

これ是より下四丁の恵様い等廿七編の始めの解分ると思て知りあべー

願主
福山
信

【つゞき】あくせしことのあくへんしが
つゞきすゐさうにつゐやくゑんずおはせ
たまぞのがうんとそうれうさきにおや
あふのとよりしてつひにわれらはよう
ゆきぞすうときさうてのわれきさうに
おねんの死をとげたりしひろぬ女九郎
やそうぢがうをもてうれがるそのむすめおはせ
また〳〵秋律もきといふものなりとおん
をんあじて味方なさしさあつよりくわんぶをも
ころげいりやくいろにうんむをまよ〳〵く
世よそろくさんとおめふところへこまし
るるあ女は世よそふくささけて女と
のろさ紀のおくにえそまのびてゐる
ときゝこゝもまさくやあをすいわらしでんじん
ちうくめのうるそさんちひにあんちを
すくめこのふるゝげにおびきよの世も
まあ女のつざゝぐてあもしてよくめさく
このざなとおひあるゝ人へのゝや女
いぬこのうちきゝよにうんべをとりてせ
さすれいあんぢがあ女らびちざんし
おもしておゐちらへさんざいあ〳〵
ころどはせるりてあやうしぐんの
官位始まんをのぞむ四らのあるじ
とあわがもう〳〵そうねんのみん
らうらいかくるらんぞそあるとも

◐あゆつはふう〳〵紀とえせ
あるひるかくきのわらおんに
ぐさんのこゝろをまうよじて
おわくのさいをうすめとり
まさきんぐそひんこんに
わどろ〳〵あくへの紀わとけ
とあふが甚さきのそころを
すじもされぐん ようあつむ
るもぐさくせんねん女色じゃ
やあらのさうひにまゝろを
うあへをうくるが母君あつく
このうさ紀のふるでらへらり
きそくひとてはしきするらお
きよどのにあうこと〳〵をそうじ
たるもあはとをぶ〳〵ちを殺
おゝくて亡君むかしひろぬ女やを
うおきてうが母らのどむさん
ちらさんとおかふそりえお
たうがりのくちふくをまうのひ
とのくふまへあんぢがお陰を
さいちうひにまあゆつそのりて
ちるぞのがかりはすうさを
あふじてとひにさとよせら
くとぞて母をおくへぶ意
がいちゆのとてはぢむるつち

☓まぞゐののちもふらぜんに
うけし〳〵あげどうやうはそ
いとおゆふきをゑんうへりつゝ
あゆがとらまぞのそをこぐくき
いちぶあ〳〵ふのあのがくう
それとくらべをつぐ〳〵母なう
あゆうとききてなすむあれ
のねぎじいで あゆうぐんの
かうべをばおろはぞくす
うちきてよがお首をうかひ
ふらちおとしゝのきうよに
あふうじもうまちどあ〳〵え
ひとろけあよこうぞかくへふ
むひとどろ紀のゝそをえあぶす
いこゐときいでかくごあれ
ぶ〳〵ろうらとこ〳〵ある
かくあをまちうやをとぬき
まうらふはぶりうぎじとじろ
はまゐるそのおゆふさ その
こ紀らうのあゆうぐんへ
やそ〳〵れのそをとひつくし
ぬきうぎじへるらおきてよが
かひなをおさえてらとうせば
そのうちおやくもやをところ
よりあひがのあゝうせうあふ

あふぞおひげのちりにとびくろ
らふとまとてて あのひ〳〵あんぢが
おろうつゝらふふくに紀しろけめの
きゝたじろうくてとし〳〵も
たやくうんちうすうあべこの
うちきゝにつゝじさうくくうう
とのゝ色さくばれとおし〳〵めく
けうくすぐへあくぶさうと
をとつきぞあや〳〵の女「いま
うがきまどのうめのくゝろ
まんぢかにらぶ〳〵あるやあうり
そのものいうがへん〳〵もえ
ひそんいづいちゝかうくいせも
たゞあそのといひし秋律時き
とのとふあなうくふてむせんの
さいどさげし色しゆそちょうきゝめ
あそひちうくめし〳〵の色しのふ
りに侍女ちよふたろうとゐふめめ
まう〳〵かひろぬ女けめのたちうの
とや邪法秘にあちめる楽器
おそうびひあく〳〵この世をあのび
あて今へそきあ女とするさを〳〵
うの礫豹仕といふ大ぬをいひかつに
その名を妙音比丘尼めうおんひくにと
けのくちふうけいうく恋わふの◐

けのさく かく恋ふぶんにまあおふ
せ色がれそや のが色ぬとところ
ときとりかゝぐそのゆをと
きのうゝうちきゝよそろうり
あやうぐんにつゐうるこのむの
ありさあへきのまくあるこも
しびう〳〵ろうこゝろのおん
いのちつとまあくそさへにある
ゐま〳〵かぶあゆうぐんうし〳〵ろ
とうんえきぶのや女へそうろう
のや女まくやまをつけいりて
おめわぶちひろのことへあち
あやしの雪やうたてさけら
色あるじのあ女がうめくる色しも
いろふあはれてそれとあく
うの姫ゆきくるまるぞその
ひめにそのあめりげのふう
のふいろうとゝろもまろあぬきて
あ女がまをとりひ紀いうさら
べさぶのうちのひよくれん
ゞりひそまれぬを〳〵どうの
よるのふすまのおやにし〳〵き
いあつぐさけそのむとひ色
く身心ゐんにゆうたのぶらし
おひたゞし〳〵くちせまきあひ☓

かく〳〵につまくる火焔紀 ゆが
らえのひあちへあけいえあへぐう
パツとの色のおとらく〳〵も女
にひぶけいやあくはうるてあやぶ
ありろうひちごにとぞくるの色
のおとされとのしく こぞのとある
エイくおちとまんべんおいせうき
きの女をうりらとむ そのふせ
ぜいはひ〳〵くとのあゆをある
らるでぶのうんぜんまもでもとと
きるまちうりごあ〳〵ことくが
ひろうりと夏にあどろくうち
うゝそのらふをおやくもさとう
とゝのろとろやゝ〳〵とびつ
くりじあや〳〵ととれもいでさう
ろりかゝるところへ舟ぞその
余女おけていりくるあゆう
ぐんのきんどぬめのおめくふ
甲冑おこそつけねども
いづれもあゆうるのくさり
かくぶらつとらひぐ〳〵しき
いぞくらにおきさゝの
やりをひつかえよ〳〵よう
とうのこさせうくさひ
ゝ世めのやぶゆと【つゞき】

（つゞき）つゐにはせいぞうのしきうちにわかんこゑにふけ「コリヤア おちつけ おちつき うたがひをまうくことせんねんいこくのおやまのひとまうんで わが身ひろめながら ちんこうず そんなのみふくのう[illegible]とねふひきねんきんぎやうこくふたのそうく七ぐゑんをまうかうしぐんのうおつめし めつおんびくにどくあかふふ身しむかいふに［illegible］がたくぞすんちがうかのうえくあかつさせんとそのうそうかいしなもそうらふぞく あかのけいさく それときこゆくちし おとすき身しむかいとまうをてとうゑたつまうろつてふむかんのねぶしさるゆでもおうくとらいあかがかくれはええゆへべこまとの ふそうのへうつまゆを身らおきそのかくとさうだくてぎんねんやらもせしやひどろきぞえのゆうおんふとこうとあのせあかぶんのうけをきうめとこを身しつがとしどうのねんぶうんと

ああとくまうくまうのあかぜんていしきでいゆてそをせきんどまづあかうぐんのくえ人はむとうき「かりぞあうるけいひやくまうかんとみがうふてききちはうけのあかしもこころのこてみせうはしへいとめつているしくされどけいさくごふあるのえべろたるをいちくにつまろふかうろうおきまくえろうろかわどのこととをてむ身ゆくりとおろしきめのどもおつこれとまうすもてきまとのどぶうれまちますさろうがぜんびやうにさあうあのだあまでとのひきやせつもうしやわとしまてあかべうちきまへそろくとねめつけぞアひきあちゃのひろ娘あかのあおびちくひどのもうれおあのきそうけつりくもむゑんのうらをうれふさうすてくそせえあふいせいしそかくうまくへよんだうぞ たうのくえりたひろぬるあるのものひどのくゑんつもかくごせよといつくうかぎしきうつくるをあかのいぐんせんゆそうんまくうけとあ「ヤアおろう

うかゞゐんとうくし目めつけそのとあしそりやくりうくも山中ゆくひぬのことあはきぞそうけ見龍とのふうすしぞのさくれうやうくのへしそ身しせご身まちしてかごふのせ身そのなしやくやぬとうろとのふるでうふごもおひて あうもおやししためへそのまとかいしとめんぜんへひきゆくしつかせい申すますゑいのいちどろられてあやしんへそろく まうりの牢屋やいこふのもちさうれちんとむこまうんとおんちあかのやアチおへいのくすまじとあかのぶこをへおめうおんかどうきぞそのぐやけんまうろうがうあるぞくいざかめしへいあんだであくうのを身しのくのかふは堅牢ゆくあるいとやとやぶりて ゆげの身はいうすおあつとどひゆく身べ

そくさんと あのめしもとをおふおんふあおふせしそのわぎはふらびどう身とちうちかくりしてあさえうふわたくをど申すへぜんねんあぐくといくべそうつこてどへをきご「うおききかどのさひどうまうりちうそどうらしてたうりしもえつのあかいあるとんゆちくて娘ともかふさ身しふうぶたらえ「それふつけてもふんかねよいへいおぶだちするひろぬあ あるのふしころうきすぎ人たらふうみすとともさんぞゑのでいき身しでかくつてちあかくとおぐくらくかまじもころおくめの身しとてとゞけうちゃうわわのひしもやちうかわらがけいのつなべくあかくかく べくあぐざんねんとおのがとがしぞまぎつつゐものもおうとゆふまくてさるかや しさうそのめんさらどうらいあひのすぎ戸どをおしあけたちいづるひろ娘あるのこもまくあがるのいでくちふあろかな

あつやみぞろぎさよかんち君く おんとうけるがぐちんうとうべちんそのけのこうあしかくどのふひとうがつんへいぎあいずうえれいわそうへよりゆき娘しまうくつづちひぢのせゐ惟幕がのうちふつがきをぞあろのけいさくめがてすをおんだ浅智ちえ ふひえぞくべきことぞうのせんあぞとかくすぐもかこぞうがきあら まつく同性どうやそちらがまてらのおけんどうけついでぶしやうへおごうすめうおんびくふあれおでいきをふうきすれしうらずめんちいをおおえおるやいうまくとつめとのまえめらかんあしんとまあぞよふせ「かるかどあんぢぐむごそくあうどうれとかあれとも ごこあふかがえのそうまうずかんぞせえしテくそちゃへつふへとぶいつくゆてこあがりえしぞとのくおあかのふうめ ふろて「う身しうんぢをえおかり身しいさえぬるそれの日いあさちくのうんきぞうけまくてふうろゆいあをよくてとへめぐり世よの動静ようすを

あかのいふちんじとうわらさらひ「いかにもふうんへそ身しざる身しおんぢつれをひとをやへつゆぎひあふよくとあつてござあうくさゝせひつすぞへそいのちをうらちきまもとらてくすりとおさんと ゑんいうまうとともふととをそろりのそれいひとやのいのちさきすおるかいのちとふぶつすゆうあかういうちめいそてみせうくちいちかうせんあうのあかあひゆそあるにうひうさきさらかうれの身あり身しが趣あすのそさせのおとろせかくもおがてくのあさまのうちにものくるはいあろりやゑのかくふのつくろけんぞくゆそいぢてそうとのきうるいかりにすぐくとおし身しておやしえあゆつの娘かくとせいわろあきんとつうでもゆてあるとせらるそのあかぶひそうれつぶろおんぢうむかんまつくそ身しが「つぎへ

梅堂國政画

柳亭種彦遺稿

久保田彦作編次

御届明治十六年三月十日

厚化粧萬年嶋田 九編 春水作 大尾 國貞画

新局九尾傳 九編 春水作 大尾 國貞画

室町源氏胡蝶巻 三十編 種彦作 大尾 國貞画

筆海四國聞書 十五編 種彦作 大尾 國貞画

鼠問通夜譚 十編 種彦作 大尾 國貞画

月鴉墨画廻禰襠 廿編 種彦作 大尾 國貞画

童謡妙々車 三十編 種彦作 大尾 國貞画

花封書玉章 十編 種彦作 大尾 國貞画

薄保幼日記 三十編 春水作 大尾 國貞画

七姿引蔦飾譚 十五 種彦作 大尾 國貞画

赤坂田町六丁目十三番地
編輯人 久保田彦作

京橋尾南傳馬町壹丁目二番地
出板人 林吉蔵